
異世界への旅立ち 上下巻

ココア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界への旅立ち 上下巻

【Nコード】

N1496Z

【作者名】

ココア

【あらすじ】

中学一年の2月12日、空閑^{くがはると}春斗と言う少年が奇妙な本により、異世界に飛ばされた。元の世界に戻るため、修行し、学園に入学し、ギルドに入り、本の秘密にせまる！！

異世界に飛ばされた（前書き）

何となく書いて見ました。

処女作です。

素人なので、視点の狂い、誤字、脱字があると思いますが、温かい目で見守ってください。

更新はあまり早くありません。

異世界に飛ばされた

俺の名前は『空閑 春斗』

家族は、俺と父さん、母さん、それと双子の妹『柚』の4人家族だ。俺と妹は二卵生双生児だったので顔は似ていないが、俺も妹も世間一般的にみれば顔は整っている。

妹の性格はおてんばだ。

いつも俺は妹に引つ張りまわされる。

そのせいか、俺は中学1年にしては大人びいていると言つか、さめている？？

そんな俺は中1の2月12日、いつもと同じように学校に行き、授業をまじめに受ける。

そして放課後。

俺が帰り支度をしていたら、いつもつるんでいる悪友こと『藤代 弘毅』が話しかけてきた。

「今日暇か？」

「特に用事はないが・・・」

「頼む！！倉庫の掃除手伝ってくれ！！！」

「お前、また何かやらかしたのか・・・」

弘毅はよくくだらないことをして教師に怒られている。今日もそのたぐいだろう。

「頼む!!!」

そのうち土下座までしてきそうな勢いだったので、めんどくさいが手伝うことにした。

「今度何かおこれよ。」

「ありがとー!!! やっぱ持つべきものは友だな。」

「調子のいいことばかり言いやがって。」

二人で倉庫に行き掃除を始めた。

しかし、倉庫の中はひどいものだった。

二人で整理するが一向に物が減らない。

俺は無数に散らばっている本の中から1冊を手についた。

その本のタイトルの文字は見たことなかったがなぜか読めた。

「『異世界への旅立ち 上巻』」

なんとなく本のタイトルを読んだら急に本が光りだした。
そして俺は光に包まれた。

視界が回復し辺りを見回してみる。
周りは木が生い茂っている

空は青く、太陽が出ていていい天気だ。

ここはさっきまで掃除していた倉庫ではない。

「ここは．．．どこだ．．．」

遠くでは何かの鳴き声がする。

この森は薄ら寒さを感じた。

「一体何が起こった？」

本のタイトルを読んだら光に包まれたことしかわからない。

「しかたない、少し歩いてみるか。」

10分位歩いただろうか。

「この森はどこまでつづくんだ？」

もといた場所まで、引き返そうか考えていたその時！！

急に草むらが揺れ何か飛び出して来た。

黒い狼だった。

「うおお！！」

俺は横に飛び、狼を躲した。

鋭い爪が服をかすめた。

「あつぶな！！　なんで狼がいる？」

早く逃げようと辺りを見るがすでに5匹の狼に囲まれていた

「やば…」

狼たちはじりじりと近寄ってくる。
そして狼たちは一斉に襲って来た。

もうダメだ！！と思ったその時。

「アイスグレイヴ！！」

その掛け声と共に、俺の周りの地面が凍り、無数の氷の棘が出てきた。

氷の棘は5匹の狼を串刺しにした。
数秒して氷の棘は消え、そこには生き絶えた狼が転がっていた。

「今の一体…」

放心状態でいたら、さっきの掛け声を出したと思う人が話しかけてきた。

「怪我は無いか？こんな森の中で装備もろくにしないでなにしている」

俺は放心状態から立ち直り声の主を見た。
女の人だった。

髪の色は赤く、肩にかからない長さで、顔は整っていて、目はキリッとしている。

綺麗な人だ。

「あ、ありがとうございます。助かりました。怪我は無いです。」

女の方はホツとしたような表情をし、次に少し怖い表情になった。

「多くの魔物が住んでる森の中でなにをしているんだ。腕の立つ冒険者でも、なんの装備も無しに森には入らないぞ。」

俺はなんて答えればいいのか迷った。

正直に話して信じてもらえるか微妙だ…

嘘をつくにも此処が何処だかわからないしうまくいくとは思えない。

迷った挙句正直に話すことにした。

「本のタイトルを読んで、光に包まれたと思ったら、ここに来ていました。」

「なに、お前は何処からきた？」

「日本です。」

「それは何処だ？ここにはそんな地名はない。」

「日本が…ない……なら此処は何処なんですか？」

「此処はヴァンリス王国の王都から、北に3日ほど歩いた場所にあるウィアードの森だ。」

「ヴァンリス王国？ウィアードの森？…聞いたことが…ない…

」。

「知らないのか？それなりの大国なんだが…それと、この森は魔物のランクが高くて有名だ。Aランクの冒険者でも、ソロでは、この深さまで狩にこない。ましてやお前のような子供が一人で装備も無しにこれる場所ではない。」

俺はどうやらとんでもないところにきてしまったようだ。

ここは日本でもなく、あの人が知る限り日本と言う地名はない。

俺は違う世界に来てしまったようだ。

さてこれからどうする…

「何だかよくわからないが…いろいろあったみたいだな。この近くに私の家がある。そろそろ日も暮れる。家に来ないか？夜の森は危険だ。」

「良いんですか？」

「私は一人暮らしだからな。部屋も余ってる。それにお前に少し興味がある。」

俺は頼る人が他にいないので、ついていくことにした。

異世界に飛ばされて - 1日目

俺は女の人について行った。

15分くらい歩いたら家についた。

「ここが私の家だ。さあ、入ってくれ。遠慮することはない。」

いくつか部屋があるが、この部屋には必要最低限の物しかなかった。

「そこに座ってくれ。」

俺は言われるがままに座り、女の人はお茶を二人分もって、向かいの椅子に座った。

「まだ名前を言ってなかったな、私の名前はネル・アルベールだ。」

「俺は空閑 春斗です。」

「クガ ハルト・・・珍しい名前だな。」

「ファミリィネームがクガで、ファーストネームがハルトです。」

「ハルト…私に説明してくれないか。森にいた訳を。」

俺はここに來た経緯を説明した。

ネルさんは俺の話に、時々相槌をうったり、何か考えているようなしぐさをした。

「なるほど、大体の経緯はわかった。ハルトは日本という国に住ん

でいて、見た事が無い文字が読め、本のタイトルを読んだら光に包まれた。そして気づいたら、この森の中にいて、ブラックウルフに襲われているところを私が助けた．．．と。ハルトは異世界人ということになるのか。」

「そうですね。ところで、俺を襲った黒い狼はブラックウルフって名前なんですか？」

「そうだ、ハルトの住んでいる日本といったか、そこにはいないのか？」

「魔物は俺の住んでいる日本どころか、世界中探しても一匹もいません。」

「そうなのか！安全な国なんだな。」

「俺の国では、魔物より人間のほうが怖いですよ．．．それより、以前ここに俺のように来た人はいませんか。」

俺のほかに来ている人がいれば話を聞けるのだが。ネルさんはまた少し考えていた。

「悪いが私の知るなかではないいな。」

俺のほかには来ていないのか．．．俺はだめもとで聞いてみた。

「そうですね．．．なら戻る方法はわかりますか？」

「話を聞く限り、ハルトをこの世界に飛ばした本には、何かしらの

魔法がかかっていたと考えられる。」

魔法．．．魔法．．．魔法！？

「この世界には魔法があるんですか！！」

「ブラックウルフから助けるとき私が使っただろう。」

あれは魔法だったのか．．．あの時は放心状態だったからよく覚えていなかった。でも魔法があるなら．．．

「元の世界に戻るための魔法はないんですか？」

「私は知らないし、この世界に存在するのかもわからない。」

俺は唇をかみ締めた。

元の世界には戻れない。

「まだあきらめるな。」

「気休めはいいですよ．．．」

「まだ可能性はある。憶測に過ぎないが、ハルトを飛ばした本は『異世界への旅立ち 上巻』と書いてあったのだろう？なら下巻があってもおかしくない。もしかしたらこの世界にあるかもしれない。」

俺に一筋の光が見えた。

「ほ、本当ですか？」

「憶測でしかないがな、可能性は十分にある。」

「でも、もうこっちの世界で使われていたら？」

「それは無いだろう。その本は読むことによって発動するものだ。それも選ばれたものしか読めないようになってるのだろう。選ばれたのはハルトだ。他のやつが見つけても読めないだろう。」

「なら、俺はその本を探しに行きます！！」

そういつて俺は出て行こうとした。

「まてまて！！そうあわてるな。ハルトはまだ、この世界のことはまったく知らないだろ。外に出るにはもう暗いし魔物がいて危険だ。早く本をみつけて帰りたいのは山々だが、本はもしかしたら遺跡の中にあり、遺跡には魔物やガーディアンがいるかも知れない。旅をするにしても知識と力が必要。ハルトにはまだ知識も力もない。本は使われることは無いのだから、知識と力をつけてから旅に出たほうがいい。」

「でも・・・。」

「どのみち、今日はもう外には出られない。夕飯を食べてゆっくり休め。」

早く帰りたいが今の俺では本を見つけるのは無理だ・・・

「わかりました・・・。」

「よし。なら遅くなってしまったが夕飯を食べよう。」

その言葉とともに俺のお腹が盛大になった。

夕飯に出た肉は、何の肉かわからなかったがうまかった。

そして、今日は色々あったせいかベットに横になったら、すぐに睡魔に襲われ眠りについた。

異世界に飛ばされて - 2日目 - 午前

翌朝の8時、俺は目が覚めた。

いつも寝ている部屋ではなかった。

「やっぱり夢ではなかったのか・・・」

だが、元の世界に帰れる可能性はある。

俺は力をつけ、必ず帰ってみせる！！

そう意気込んでから、リビングに行った。

リビングではネルさんがすでに起きていて、朝食の準備をしていた。

「目が覚めたか。もう少しでできるから座って待っていてくれ。」

「おはようございます。すみません、ありがとうございます。」

少しして出てきたものは、パンとクリームシチュウとサラダだった。
朝食を食べながらこれからのことを話した。

「これから俺は、どうすればいいんですか？」

「ハルトはここで、力と知識をつける。」

「力は魔法、知識はこの世界での一般常識のことですか？」

「そうだ。だが魔法だけではなく剣術も覚えたほうがいいだろう。」

知識はその他に、魔物のことや遺跡、旅するのに必要な知識もだ。

「

「誰が教えてくれるんですか？」

「私しかいないだろ。」

「ネルさんがですか!？」

「今は隠居しているが、こう見えても、私はそれなりに名の知れた冒険者なのだぞ！」

「そうだったんですか。」

俺は、こんな綺麗な人が冒険者だったとは思わなかった。

「そこら辺の冒険者より腕は確かだ。だから安心しろ。だが私はそんなに甘くは無いぞ。少し休んだら早速修行を始める。」

「大丈夫です。帰るためならどんなことでも乗り越えて見せます！」

食休みをして、それから修行がはじまった。

「そう言えば、ハルトは何歳なんだ？」

「俺は13歳です。」

「なに!!私はずきり15歳位だと思っていた。」

「ネルさんはなんさ……………」

何歳なんですかと聞こうとしたところ、ものすごい殺気がでた。
うん、この話はしてはいけない……

俺はそう思った。

殺気もおさまったところで修行が始まった。

「魔法を使うには魔力がいる、まずはハルトの魔力を測ってみよう。」

ネルさんはそういつて奥の部屋に入り水晶玉を持ってきた。

「この水晶に両手を当ててくれ。」

俺は水晶に両手を当てた。

すると、水晶から文字が浮かび上がってきた。

「何と書いてある？」

「えっと……魔力量S、適性属性は風、雷、光……と書いてあります。」

ネルさんは驚いた顔をした。

「なに！？間違いではないな？」

「確かにそう書いてあります。」

「ハルトには魔法の才能があるようだ。」

「本当ですか!!」

「魔力量Sは相当なものだ。魔力量はG・F・E・D・C・B・A・S・SS・SSSの順に多くなる。それに適性属性が3つもある。普通の人は一つの属性しか適合しない。才能のある者でも二つだ。まれに三つ適合する者もいるが、ほとんどいない。」

「魔力量Sは魔力の量で、多いことはわかりましたけど、適正属性とはなんですか？」

「まだ説明していなかったな。魔法について説明しよう。魔法には属性魔法、治癒魔法、移転魔法、召喚魔法、付加魔法などがある。属性は火、水、風、雷、土、木、氷、光、闇だ。属性魔法は誰でも魔力があれば、全ての属性が使えるが、自分に適合した属性だけが100%能力を発揮できる。治癒、移転、召喚、付加魔法はそれにセンスがいる。できる人も要ればできない人もいる。自分の適性属性は覚えておけ。」

「わかりました。ネルさんの適性属性は何ですか？」

「あんまり適性属性は人に安易に教えるものではない。まあ、ハルトには教えてやろう。私の適性属性は水、風、氷だ。」

「ネルさんも適性属性三つ持っているじゃないですか!!」

「だから言っただろ、それなりの冒険者だと。」

やっぱりネルさんはすごい人だったのか。

「さて、魔力があることはわかった。だが、それを使いこなせなけ

れば意味は無い。まずは魔力を肌で感じてみる。私と手のひらを合わせろ。」

言われたとおり、手のひらを合わせた。

「今から魔力を送る。その感覚をよく覚えておけ。いくぞ。」

俺は緊張して待ち構えた。

するとネルさんの手が光だし、俺の手を伝ってきた。

ネルさんの手のひら伝わる体温とは別の何か温かいものを感じた。これが魔力というものか・・・？

「どうだ、わかったか？」

「はい、なんとなくですけど。」

「なら自分で魔力を集めてみる。心臓の辺りを意識して、感じたものを手に集めるイメージだ。」

俺はうなずき、胸の辺りを意識したら、さっきと似たものを感じた。それを手に集めるように意識した。

すると手が、ネルさんのようにはいかなかったが、ぼんやりと光った。

「それが魔力だ。しかし、これだけでは魔法は使えない。今度は魔力を練る訓練だ。魔力を練るとは、魔力と精神エネルギーを混ぜ合わせることだ。精神エネルギーを混ぜた魔力は『マナ』という。精神エネルギーを混ぜた魔力は、体の外に出てもコントロールができる。このようにな。」

そういつてネルさんは、手のひらに青白く光る球体を創り、自由に動かして見せた。

「これがマナだ。ハルトもやってみる。さっきのように手に魔力を集め、球体としてマナを体の外に出す。ここからはイメージだ。はつきり起こしたい現象をイメージすることで、魔力に精神エネルギーを混ぜることができる。マナを球体として出すイメージをしつかりしろ。イメージによってマナの質は決まる。」

どうやら魔法はイメージが大切で、とても感覚的なようだ。

俺はさっきと同じように魔力を集め、球体となり手のひらに浮かぶように強くイメージした。

すると急に、さっきまであった魔力が手から抜け、手のひらの上に、10センチ位の白い球体が浮かんでいた。

「やった！！できた！！」

俺は球体を思うがままに動かした。
しかし2、3分で消えてしまった。

「上出来だな。これなら魔法も上達するだろう。」

「やった！！ところで、何でネルさんの球体は青白く、俺の球体は白いんですか？」

「それは、私の適性属性の中で一番相性がいいのが氷で、ハルトは光だからだ。魔力には色があるそれぞれ適性属性と関係している。
火は赤、水は青、風は黄緑、雷は黄、土は茶、氷は淡青、木は緑、光は白、闇は黒だ。」

「なるほど。俺は適性属性の風、雷、光の中で、光がさらに相性がいいのか。」

「そういうことだ。それじゃあ魔法を使ってみるか。まずは簡単な火属性の魔法『ファイヤーボール』だ。火はイメージしやすいからな。さっきの要領で、魔力を練り、手のひらにマナの球体の代わりに火球が出るようにイメージするんだ。そして『ファイヤーボール』といえ。魔法の名前の詠唱は破棄できるがイメージがしっかりできないと無理だ。多少イメージが悪くても魔法の名前を言うことで補える。」

「いよいよ魔法が使える。」

俺ははやる気持ちを抑え、うなずいた。

そして火球が出るイメージをし魔法の名前を言った。

「ファイヤーボール！」

手のひらに、さっきのマナの球体と同じ位の火球が現れた。

「初めてにしてはなかなかだな。これから色々、魔法を教えていくが、イメージをしっかりしろ。イメージが鮮明になれば、魔法の名前の詠唱は破棄できる。細かいことは追々説明する。」

俺は初めて魔法を使ったことで興奮していた。

ネルさんの最後の話はあまり入ってこなかった。

「おい！聞いているのか！！」

「は、はい！えっと・・・魔法はイメージが大事で、イメージしだ

いで名前の詠唱は破棄できる・・・ですね。」

「そうだ、暇があつたらマナの球体を速く出す練習したり、形も球体だけでなく、動物の形などにできるように練習しておけ。」

「わかりました。」

「よろしい。区切りもいいし、そろそろ昼食にしよう。」

魔力を使つたせいか、俺はとてもお腹が減っていた。

昼食の準備をしている間、午後の予定を決め、食休みの後、剣術の修行をすることになった。

異世界に飛ばされて - 2日目 - 午後

俺は昼食をもりもり食べて、今は食休み中だ。

昼食を食べ過ぎてしまったので、少し長めにしてもらった。

「そろそろ剣術の修行を始めるぞ。」

ちょうどお腹も落ち着いたところだ。

だが、剣術の修行といっても、俺は元の世界では剣なんて握ったことの無い、素人だ。

魔法の素質はあったが、剣術は不安だ。

「俺、向こうの世界で、剣なんて握ったことないんですけど。」

「大丈夫だ。手取り足取り教えてやる。私は剣の腕も一流だ。」

ここにはネルさんしかいないので、全て任せるしかない。

「まずはハルトの身体能力を知りたい。」

ネルさんは剣を渡してきた。

「さあ、私を殺すつもりでかかって来い。」

「そんなの無理ですよ!」

「こないのならこっちからいくぞ。」

そいつってネルさんは、切りかかってきた。

俺はとつさに剣を構え、何とか攻撃をしのいだ。

「ちょ．．．ちょっと待ってくださいよ!!」

しかし、ネルさんは待ってくれなかった。

俺は腹をくくり応戦することにした。

ネルさんの攻撃をなんとか弾き、距離をとった。

深呼吸して、切りかかるべくおもいつきり踏み込んだ。

「はっ!!!!」

なんと、俺は元の世界では考えられないようなスピードで間合いをつめた。

「なに!!」

一瞬で間合いをつめられたことに、ネルさんは驚いていた。そして、激しい剣の打ち合いがはじまった。

しかし、長くは続かず、俺は剣を弾き飛ばされた。
ネルさんは剣を鞘に収めた。

「私とあれだけ打ち合うとは．．．剣術は素人だったが、身体能力、反射神経、動体視力には驚かされた。向こうの世界で何か特別なことをやっていたのか？」

「俺も驚いています．．．元の世界では特に何もしていませんでした．．．」

「そうか．．．この世界にきて身体能力、反射神経、動体視力になり向しているようだ。」

俺は自分の身体に驚いた。

まさか、こんなに身体が動き、よく見え、反応できるとは．．．

「それだけの身体能力があれば、すぐに剣術も覚えられるだろう。これからずっと剣術の修行は、私との実戦だ。ハルトには経験がない。剣の動作は実戦の中で私から見て学べ。剣術がそれなりになったら、腕試しに、この森の魔物を狩にいこう。」

俺はネルさんの言葉を聞いて顔が引きつった。

あれだけの動きをしても、5分もたなかった俺が、ネルさんとずっと実戦をするのかと思うと．．．

「さあ！はじめるぞ！！最近私も退屈していたところだ。遠慮なくかかって来い！！！」

こうしてネルさんのいじめ＋暇つぶし．．．もとい．．．剣術の修行は暗くなるまで続いた．．．

この日、俺は剣術の修行でボロボロになった。

夕食を食べ、風呂に入り、ベットに寝て、こんな生活が続くのかと思うと鬱になった．．．

色々考えていたが、剣術の修行で疲れたのですぐに眠りについた。

異世界に飛ばされて - 2年目 -

俺が異世界に飛ばされて2年と1ヶ月ちよいたち、今日は3月30日である。

この世界での暦は、元の世界と少し違い、1ヶ月30日で1 1 2月まであり1年360日だ。

俺は今年の10月で16歳になる。

元の世界なら俺は、高校に入学しているはずだ。

そんなことを思いながら俺は、朝の日課になっている、マナの球体をいろいろな動物に変えていく練習をしていた。

最初の頃は球体から立方体に変えるのも大変だったが、今では動物から他の動物へ、スムーズに変えられるようになっていた。

その後、ネルさんと魔法オンリーの実戦をやり、午後は剣術と魔法を両方使い実戦をしていた。

もうすでに俺は、ネルさんと互角の勝負ができるようになっていた。

「はあああ!!」

俺は、風を自分に纏わせ一瞬の隙を突き、ネルさんの手から剣を弾き飛ばした。

俺もネルさんも息をはずませていた。

「ハルトはこの2年間で本当に強くなった。もう私を超えたな。」

「そんなこと無いですよ。剣の技術も魔法もまだまだネルさんには及びません。」

「ふん・・・ハルトが奥の手を使えば、私なんて足元にも及ばん。」

「ネルさんだつて奥の手を隠し持っているじゃないですか・・・」

そういいながら俺は笑い、ネルさんもつられて笑った。

その夜、夕飯を食べた後、ネルさんは大事な話があるといい、俺をリビングに呼んだ。

「話つて何ですか？」

「話とはハルトの今後についてだ。」

俺の今後？もしかして、本を探す旅に出ることかな。
何を言われるのか緊張しながら続きを待った。

「ハルトは今年で16歳になるんだっただな？」

「そうですね・・・」

「この世界には各国に魔法学園があるのは教えたな。」

「はい・・・」

「すでにヴァンリス王国にある、ヴァンリス魔法学園に入学願書を出し、合格通知も来ている。入学式は4月5日だ。ここからヴァンリス王国の学園都市には歩いて3日ほどかかる。明日の朝に出発すれば、5日までにヴァンリス魔法学園につけるはずだ。ハルトはヴァンリス魔法学園に入学し、そこで3年間勉強してこい。」

「えええ！！なに勝手なことしているんですか！！！！学園より本を探す旅に行かせてくださいよ！！」

「理由もちゃんとある！ヴァンリス魔法学園には世界最大の図書館がある。その図書館に目的の本があるかもしれないし、学生でなければ入れない場所もある。それに学校には、貴族で権力を持った者が必ずいる。仲間を探したりコネを作っておいたほうが、後々必ずハルトの助けになる。集団でのコミュニケーションを学ぶこともできる。」

「だけど・・・！！」

「ハルトはずっとこの森の中で暮らしてきた。一応この世界のことの説明した。だが、まだまだ教えてないことはたくさんある。いきなり冒険者になっても一人では大変だ。学園に行き人と接して、人との付き合いかたなどを学んで来い。」

「わかりました・・・でも、卒業したら本を探す旅に出ます！！」

「卒業したら好きにすればよい。私からの教えはこれで最後だ。卒業すれば冒険者でも一人前としてやっていける。それに魔法学園卒業は何かと有利になったり、良い待遇をしてくれる。」

俺は話し合いの後、すぐにベットに入った。

学生生活か・・・

元の世界では中途半端になっちゃったからな。
明日出発。

ネルさんともお別れ．．．か。
2年間あっという間だったな。
そんなことを考えながら、俺は眠りについた。

異世界に飛ばされて - 魔法学園へ -

翌朝目が覚めて、朝食をとり魔法学園へ出発した。

準備はネルさんが昨日のうちに済ませておいてくれた。

「今まで、ありがとうございました。」

俺は今までのごことに感謝し、礼を言った。

「私も楽しかったよ。弟ができたみたいで毎日が楽しかった。たまには顔を見せにきてくれよ。」

「俺も楽しかったです。本当にありがとうございました。」

「そうだ、あまり学校などで私の名前を出さないでくれ、騒がれたくないからな・・・。」

「わかりました。」

「よし！！ハルトなら大丈夫だと思うが、気をつけろよ。」

「はい、行ってきますー！！」

「元気に、しっかり勉強しな。」

俺はネルさんと別れ、学園に向けて出発した。

森を抜けるには1日かかる。

日が暮れないうちに抜けたかったので急ぎ足になった。

1時間ほど歩いた頃10匹のブラックウルフに出会った。

昔は何もできずにやられそうになったが、今はブラックウルフと
き余裕だ。

俺は魔力を練り、風属性の魔法を使った。

「ウィンドカッター」

無数の風の刃が出現しブラックウルフ10匹を切り裂いた。

さらに何回か魔物に出会ったが難なく倒せた。

森は何とか日が暮れる前に抜けることができた。

森を抜けて30分位歩いたら、ヴァンリス王国に続く街道に出た。
今日はだいぶ日も暮れてきたので、ここで野宿することにした。

夜は特に何もなく過ぎていった。

2日目も順調に進みヴァンリス王国に入り、3日目。

あと1時間ほどでヴァンリス王国の学園都市に着く、というところ
まで来ていた。

日暮れにはまだ時間があるので、今日は宿で寝ることができると思
っていた矢先・・・

遠くで馬車が盗賊に襲われていた。

馬車の護衛も必死に守っているが、数に差がありすぎる。

護衛が5人に対して、盗賊はぱっとみ10人以上いる。

やられるのも時間の問題だ。

俺はめんどくさいが、目の前で殺されるのを、黙って見ている訳に

もいかなないので、助けにいった。
馬車を囲む盗賊に向けて、魔法を放った。

「ウィンドチェーン!!」

風属性の魔法で、風の鎖で相手を拘束することができる。

不意打ちでいきなり風が絡み付いて、身動きが取れなくなった盗賊は混乱していた。

「い、一体なんだ!?なにが起こった。」

「これは魔法です。でも一体誰が??」

大体の盗賊は捕まえたが、3人ほど逃れた。

盗賊のリーダーらしき男と子分2人である。

盗賊のリーダーは俺に向かって。

「お前は誰だ!!よくもやってくれたな!!おい殺^やつちまえ!!」
「」

子分二人に命令し、二人は俺に襲い掛かってきた。

相手は剣をもっていたので、俺は鞘がついたままで剣を構えた。

そして二人の斬撃をかわし、鞘つきの剣で一人は鳩尾を突き、もう

1人は後頭部を殴り気絶させた。

この一連の動作を見た、盗賊のリーダーは。

「なに!!お前なかなかやるな、ウチに雇われないか?金ははずむ
ぜ。」

俺はさめた口調で

「俺を雇うには高いぜ。まあ、こんな弱い盗賊じゃあ入る気もしないがな……」

盗賊のリーダーは顔を真っ赤にし

「この野郎……人が下手に出れば……俺はこいつらとは一味違うぜ！お前には死んでもらう！！」

盗賊のリーダーは剣を抜き切りかかってきた。

確かに、さっきの子分より速かったが、俺にはたいしたことなかった。

俺は斬撃を全てかわし、手首、肩、首の順に鞘つきの剣を振るい、盗賊のリーダーを倒した。

盗賊を全員ロープで縛った後、すぐに立ち去ろうとしたとき、呼び止められた。

「待ってください！！」

声で女だとわかったが、振り向いてみれば、とてもかわいい人だった。

髪の色はストロベリーブロンドでボブカット、瞳は茶色だった。

彼女は頭を下げて言った。

「助けていただき、ありがとうございます。私の名前はリュカ・アルエと申します。お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「俺の名前はハルト・クガ。大したことはしていない。」

「あのままでは、私たちは捕まっていました。それをハルト様が助

けてくださいました。捕まっていたら、私はどこかに売られていたかもしれません。」

「様はやめてくれ・・・本当に大したことはしていない。」

「ですがハルトさん・・・せめてお礼を。」

そういつて彼女は、身に着けている宝石をはずし渡してきた。

「こんな高価なもの！！受けとれないよ・・・。」

「受け取ってください！！私の気がおさまりません。」

「わかった。ありがたく貰っておくよ・・・。」

俺がそういつと彼女は顔を明るくした。

「ハルトさんはどこに向かわれているんですか。」

「俺はヴァンリス魔法学園に向かっている。」

それを聞いた彼女は目をかがやせた。

「私も魔法学園に向かっているんです、私の馬車に乗っていきませんか？」

彼女も学園の入学者らしい。

俺はお言葉に甘えて、乗せてもらうことにした。

「んじゃ、お願いしようかな。」

馬車の中で、いろいろ話した。

どこから来たとか、学園は楽しみだとか、一緒クラスになれたらうれしとか、何で俺がこんなに強いのだとか・・・

話しているうちに打ち解け、お互いをハルトとリュカと呼ぶようになった。

話していたせいか、馬車は思ったより早く着いた。

門番に合格通知を見せ、中に入った。

学園都市は中央に学園があり、その周りにいろいろなものが散らばっていた。

入学式は明後日なので明日はゆっくりできると思ったが・・・リュカが、周辺を散策しようと言ってきたので、見て回ることにした。

学園には寮があるが、まだ入れないので宿に泊まる。

リュカとは別の宿なので、明日の朝、学園の近くの広場の噴水で待ち合わせをして別れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1496z/>

異世界への旅立ち 上下巻

2011年12月5日10時49分発行